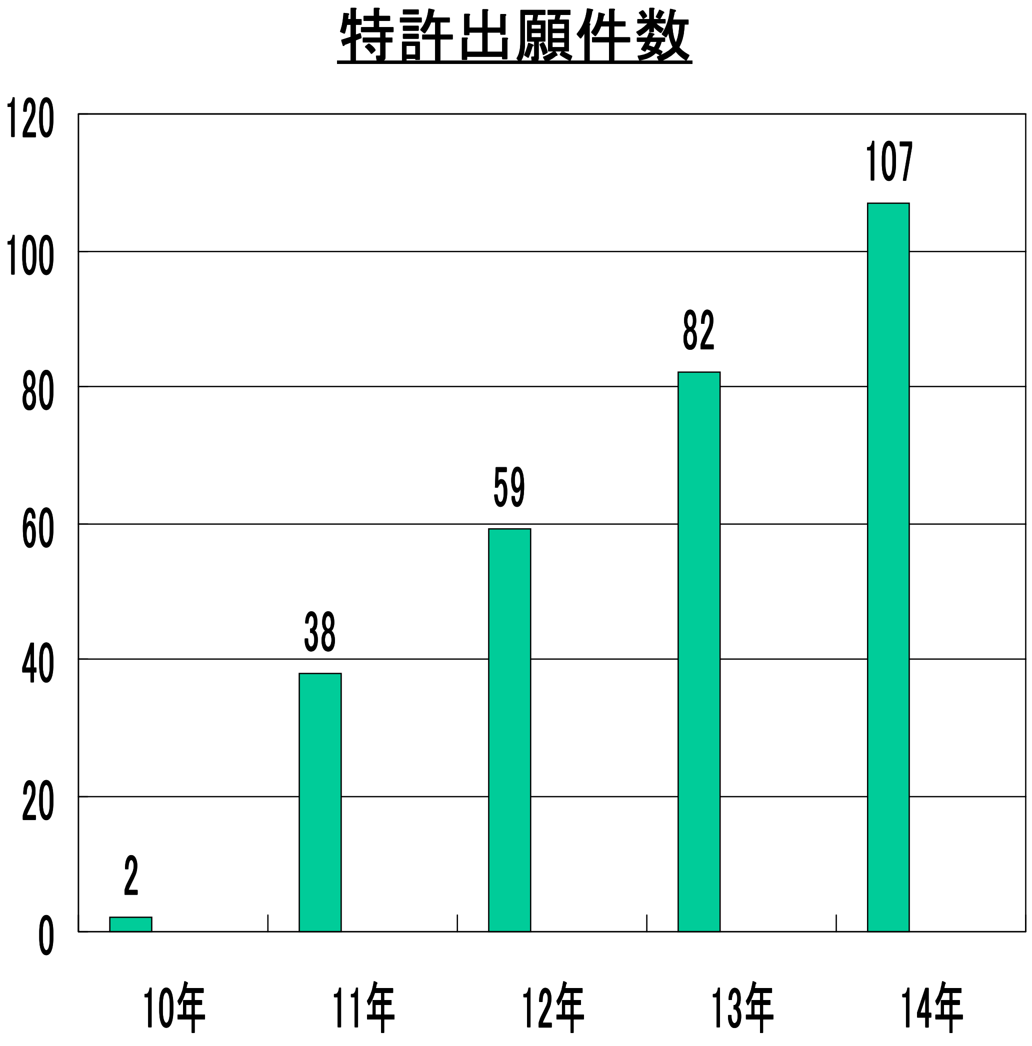
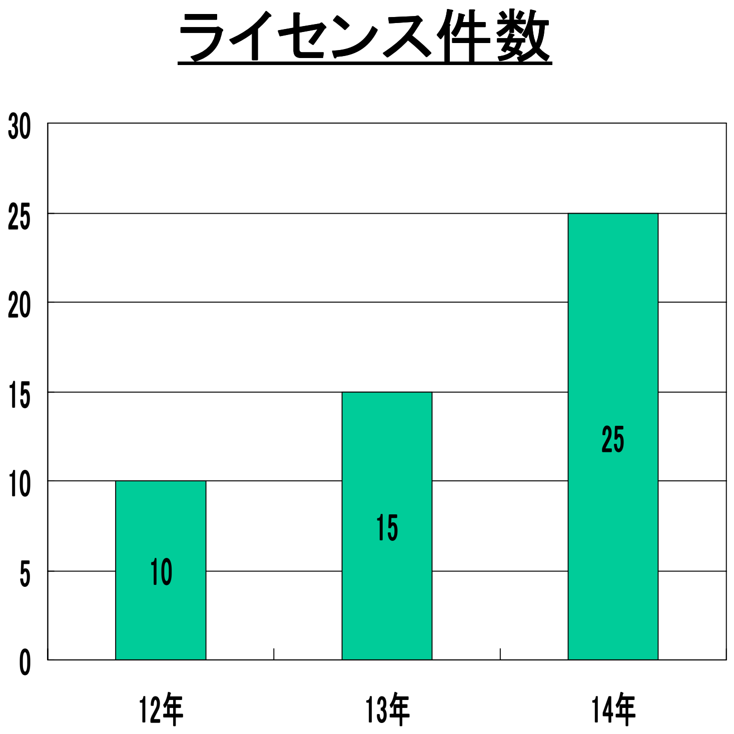
技術移転からみた
大学発のベンチャーの課題

2003年1月30日

慶應義塾大学知的資産センター
清水啓助
shimizu@ipc.keio.ac.jp

1. 大学の技術移転の状況





- 技術分野や完成度によってライセンスの可否は異なる
- バイオや新しいコンセプトは移転が困難

2. 技術移転活動を通じた経験

- バイオ等の先端分野では大学の発明と実用化との間に大きなギャップが存在する。　その理由は次の2点

（1）実用化のポテンシャルが不明である

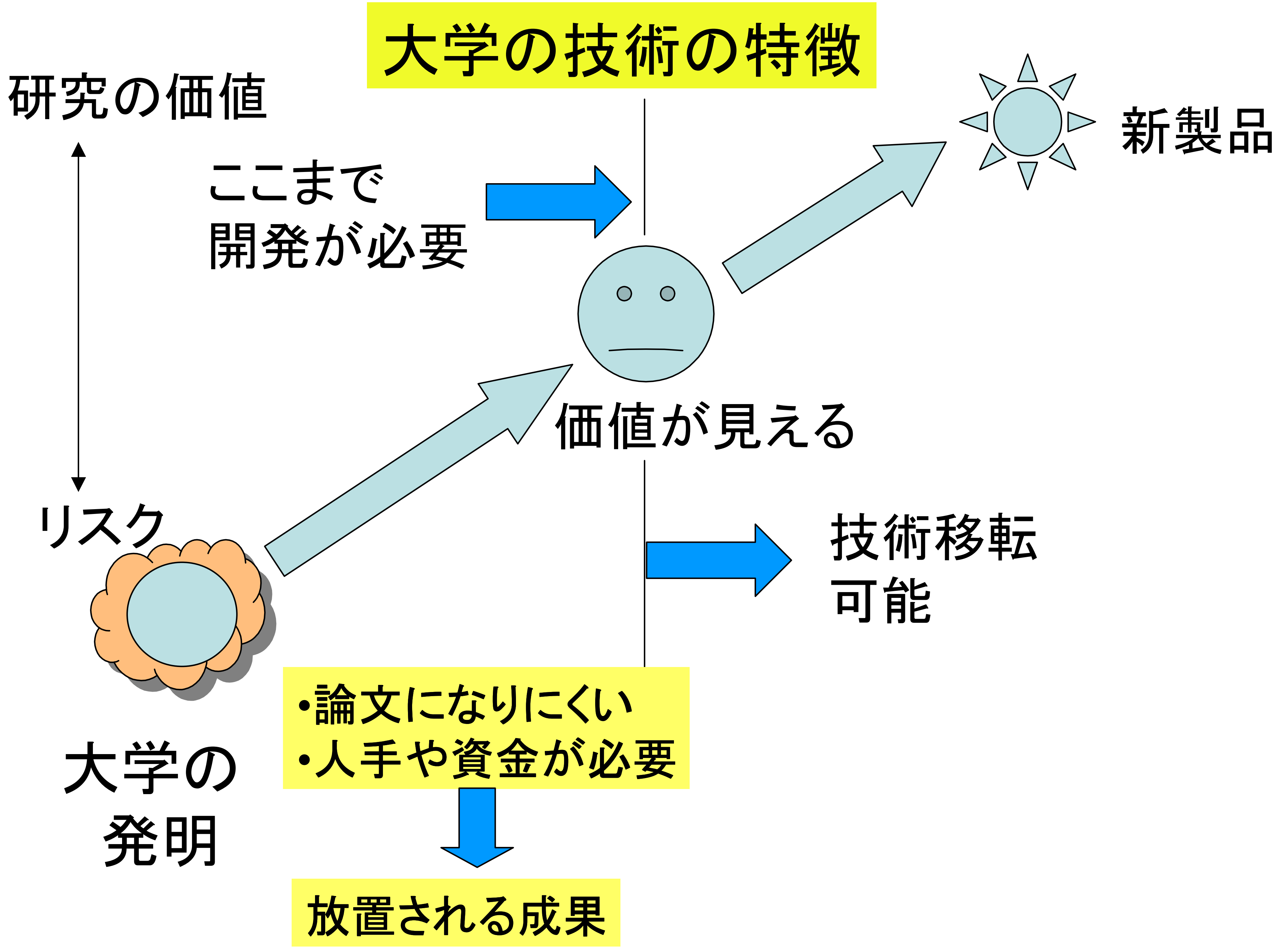
　－実用化につながるデータが整備されていない

　－特定な実験条件以外での検証が不十分である

（2）ビジネスに繋げる構想がない

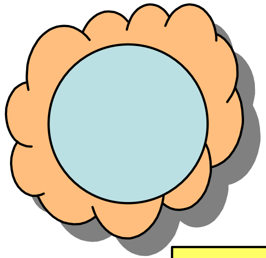
　－発明の事業化イメージが描けない

　－関連する技術との連携の道筋が見えてこない


大学の技術の特徴
研究の価値
リスク
ここまで
開発が必要
価値が見える
新製品
技術移転
可能
大学の
発明
•論文になりにくい
•人手や資金が必要
放置される成果

3. 研究とビジネスの同時並行的なインキュベーションが必要

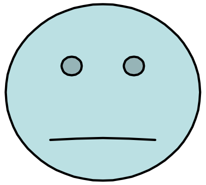
発明・発見



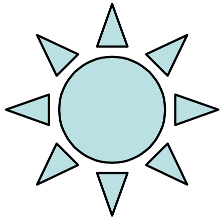
研究の検証・発展

事業化への構想

価値が見える



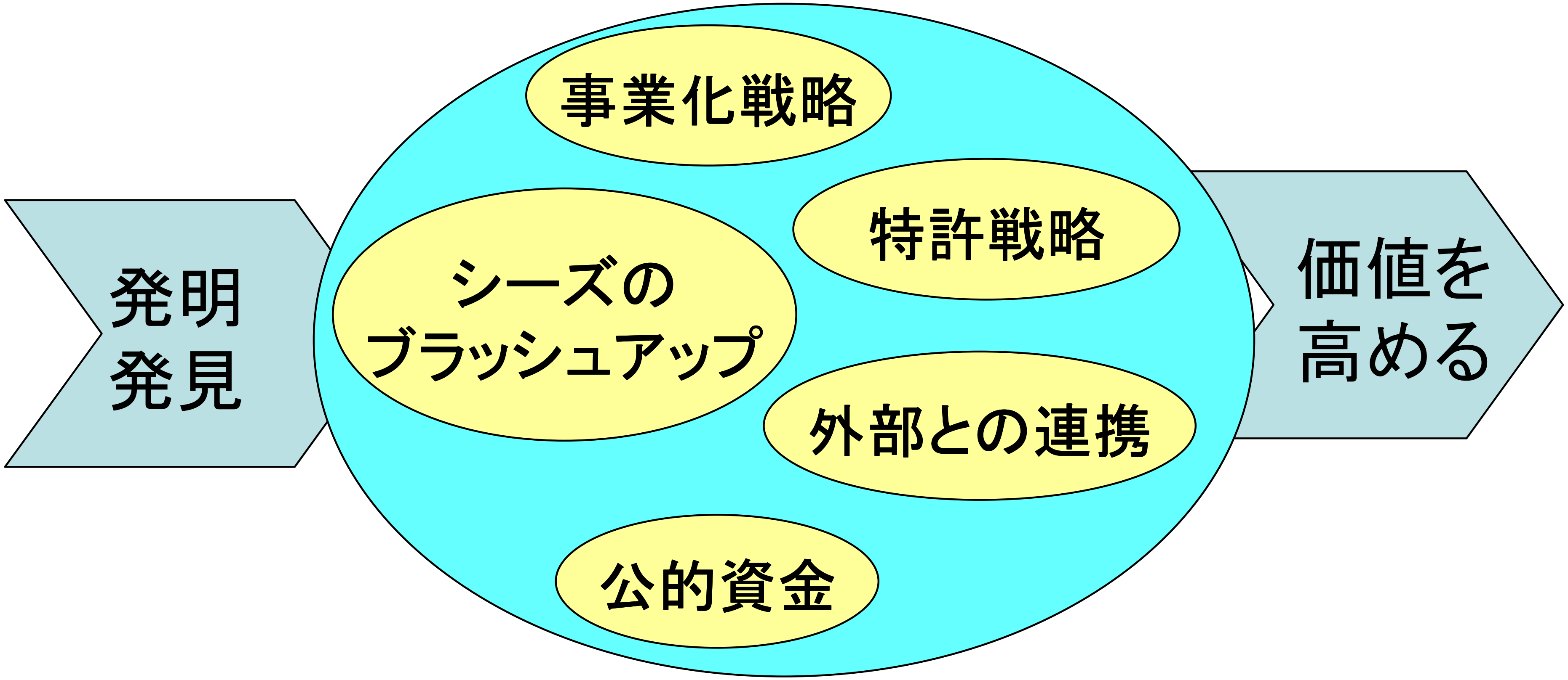
実業化



このプロセスの強化推進が不可欠

ベンチャーで進めることが有力な手段
ースピードが速い
ー資金の投入

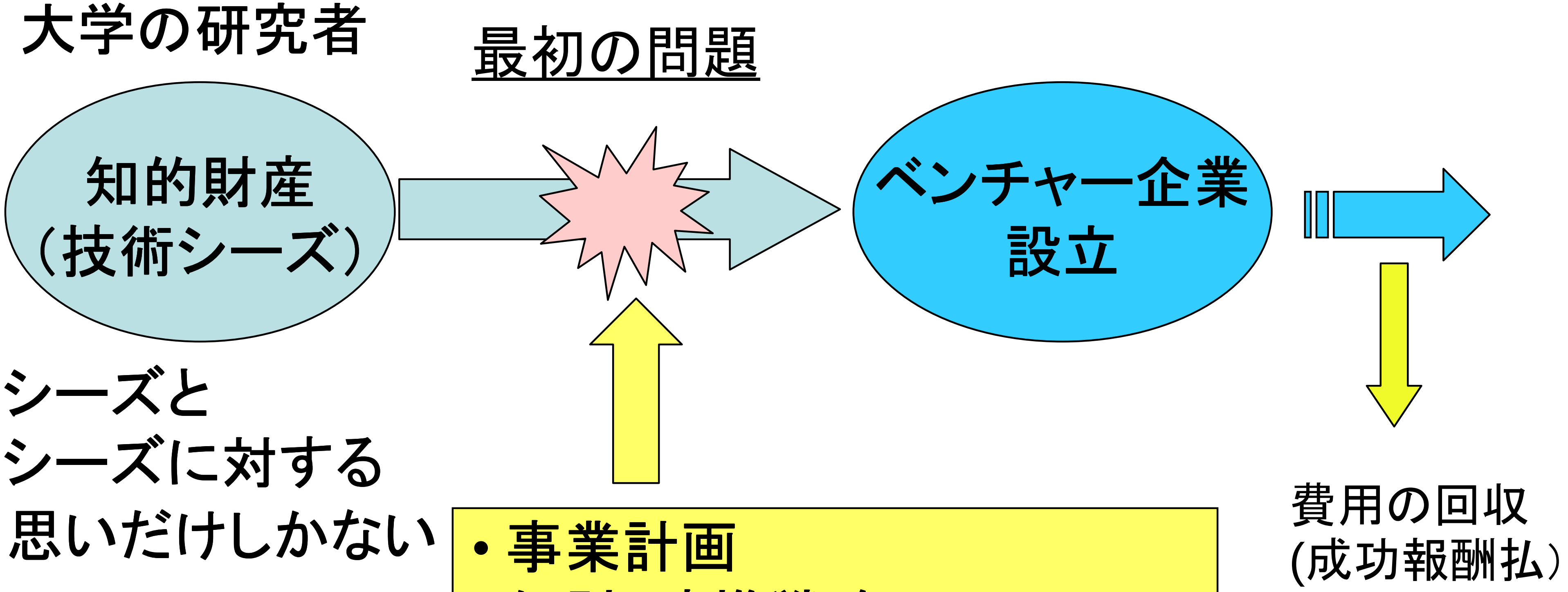
インキュベーションのプロセスは



複合する事項を戦略的にマネージメント
することが必要

4. 大学発のベンチャーの課題

大学の研究者



- シーズと
- シーズに対する
  思いだけしかない

- 事業計画も
- 起業の知識も
- 資金も ない

- 事業計画
- 知財･連携戦略
- 研究インキュベーション戦略
- 資金
- ･法務　　等に関する

包括的な創業支援

最も要な事業計画の支援

ビジネスモデル
収益プラン

- 人によって異なる計画
  (いい人とめぐり会えるか）
- 事業会社の知恵とネットワーク

特許･連携戦略

研究の展開

資金

5. 包括的な創業支援を進めるには

- 少なすぎるハンズオンのベンチャーキャピタル
  - ー層を厚くする(公的なファンドの支援）
  - ー事業会社をスピンオフした人材
  - ー信頼できる人材
- 必要な事業会社の知恵とネットワーク
- 研究施設(ウエットラボ)を有するベンチャーキャピタルの出現
- インキュベーション施設を核とした展開

６．大学の取り組み

現在

- 場の提供(研究者の交流)
- 公的資金の獲得支援
- 特許の維持管理

＋

今後

- チャレンジできる環境の整備
  起業講座／エンジェルファンド
  ／インキュベーション施設
- 本格的なリエゾン機能の拡充
  外部ネットワークの拡大
  ／支援組織との交流の促進
- 大学の技術リーソスの活用体制